

FREE MAGAZINE
NEW YEAR 2018

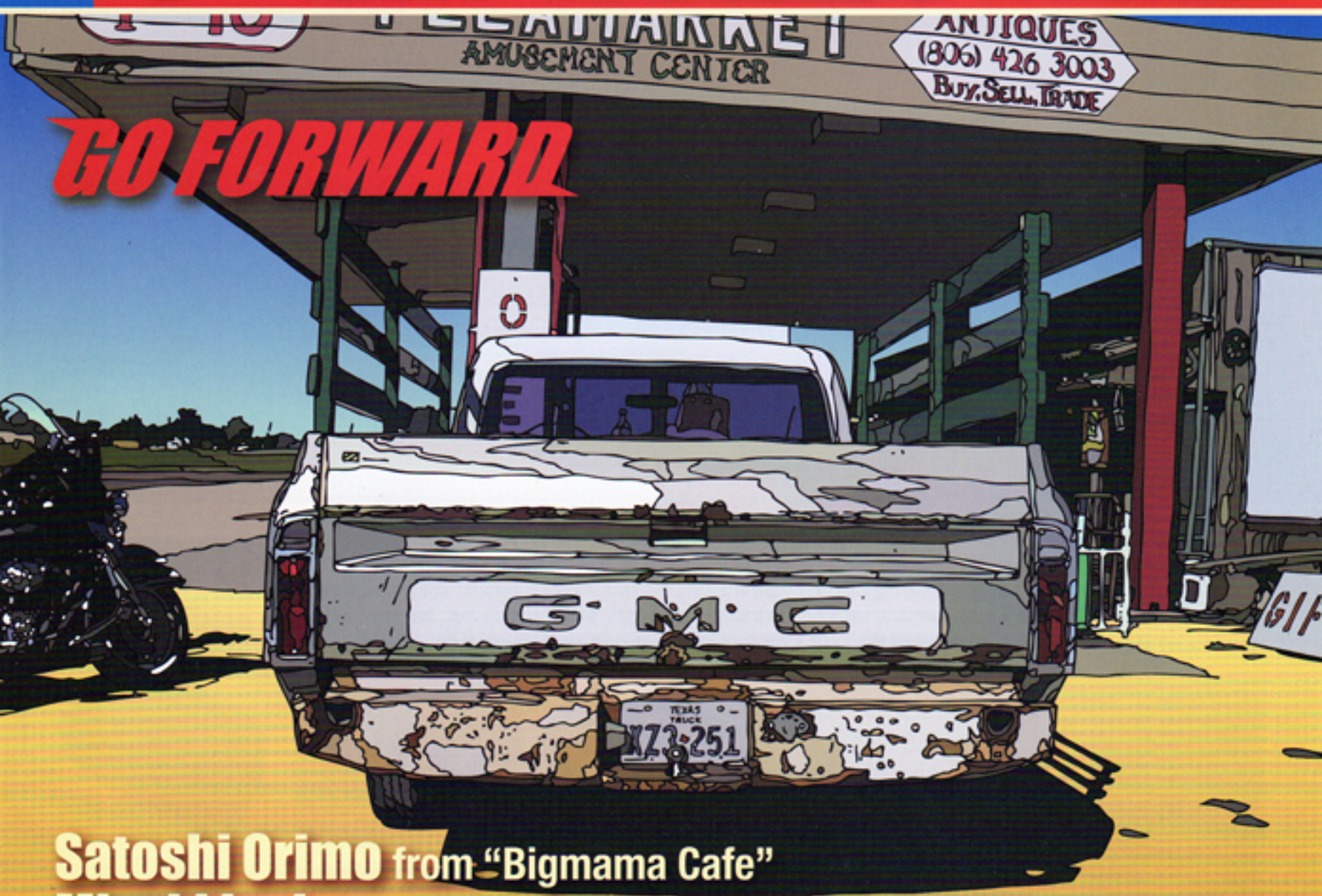
ON THE ROAD[®]

MAGAZINE



HIGH QUALITY LIFESTYLE MAGAZINE FOR "THE WHEEL JUNKIE"

GO FORWARD



Satoshi Orimo from "Bigmama Cafe"

Miyuki Isobe from "Miy-Style"

Kazuya Yamazaki & Ryo Goto from "RoughTail Leatherworks"

DJ DRAGON × Shoichi Hanyu from "REDLINE AUTOMOTIVE"

THE SPIRITS OF YOSHIMURA NOW & THEN

Harley-Davidson 2018 All-New Softail

Road Trip 63[®]

network by *SAD NISHIKAWA*

ON THE ROAD
MAGAZINE web

<http://orm-web.net>

WE ARE ONE

REDLINE AUTOMOTIVE

www.redline045.com

好きなもの、好きなことにまっすぐ

DJドラゴンさんとともに訪ねたのは、神奈川県横浜市にある『レッドラインオートモーティブ』。

60~70年代のマッスルカーを得意とするアメリカ車専門ショップだ。

2階にはアメリカ車専門のミニカーショップ『レッドラインコレクティブルズ』を併設。

この素敵な空間の主、なんとドラゴンさんの幼なじみなのである！

レッドラインオートモーティブ

DJドラゴン × 羽生勝一

DJ DRAGON

Shoichi Hanyu
from Redline Automotive



DJ、プロデューサー、デザイナー、ラジオナビゲーター、イベントオーガナイザーなど様々な顔をもつ。武田真治とともに「BLACK JAXX」としても活動。これまでにマスタング、ボルシェなどを乗り継ぐ。現在はハーレーなどを所有。

1998年創業、60~70年代のマッスルカーを得意とするアメリカ車専門ショップ『レッドラインオートモーティブ』の代表。アメリカ車専門のミニカーショップ『レッドラインコレクティブルズ』も運営。愛車は写真の1969年型カマロ。



レッドラインオートモティブの2階にあるミニカーショップ、レッドラインコレクティブルズにて、大小様々なダイキャスト・ミニカーがギッシリ！かつて60'sのマスタングを所有していたドラゴンさん、気になるのはもちろん、1/18スケールのマスタング！



羽生さんの愛車1969年型シボレー・カマロSSをはさんでクルマ談義。完璧に仕上げられたチューンドエンジンの豪快なサウンドを聴いて興奮するドラゴンさん。「いいな〜、V8エンジン！久しぶりにアメリカ車に乗れなくなっちゃった！」「売ってあげるよ！」と羽生さん。

SHOP info Redline Automotive

神奈川県横浜市港北区新羽町 889 Tel: 045-545-9111
営業時間: 12:00~20:00 定休日: 水曜 <http://www.redline045.com>

ある時、唐突に「横浜のレッドラインで知ってます？」とドラゴンさん。「アメリカ車の？」と聞くと、「そう、レッドラインの羽生くんと同級生なんですよ。」と思いがけない言葉。「レッドラインオートモティブ」はオンザロードマガジンも設置・配布頂いている老舗のアメリカ車専門店だ。羽生さんとは共通の知り合いが多く、最近も取材に伺ったばかりだ。11月某日、ドラゴンさんと合流して第三京浜を飛ばし、横浜・港北に向かった。道すがら、ドラゴンさんと羽生さんが故郷である茨

羽生さんも「まあ、当時はちょっと不良っぽいのが普通だったからね。」と返す。その後、地元で別々の高校に進む。方向性は違えどバイクに夢中だったという。「僕は『バリバリ伝説』系だったけど、羽生くんは？」「まあ、誘われて集まりに行ったり…」「あ〜わかる。行ってみたらみんな凄いカッコしてたりして。一緒に走るのイヤだな〜みたいな！」「そうそう！」と盛り上がる。「でもさ、見た目がアレだったけど、そんなに悪いことするわけじゃなかったしね。」「みんな意外に真面目だからね！」

その後ドラゴンさんは上京、DJの道に進む前は原宿・竹下通りの古着屋で働いた。洋服好きはこの頃からなのだ。同じ頃に羽生さんも上京、クルマの世界に足を踏み入れるきっかけは六本木の飲食店勤務時代。「当時近くに派手なアメリカ車専門店があって、憧れもあってそこに5年ぐらい勤めて、30歳で独立したんだ。来年でもう20年！」「凄いね、真面目にやってるじゃない！」「こういうクルマを扱っていると、何だか怪しいって思われちゃうこともあるけれど、そもそも怪しいことやってたら20年も続かないから。」「古いアメリカ車だけにこだわって、広げずに手堅くやっているのがいいん

だね！」「意外だと思われるかも知れないけど、結構固い。実はあんまり派手じゃない。これって茨城の県民性だと思うな〜。」羽生さんが続ける。「ミニカーも自分が好きだから仕入れて売っている。もちろんアメリカ車だけ。このあいだ仕事でラスベガスのSEMAショーに行って、最新のカスタムカーをたっぷり見て、帰りにミニカーも買い付けてきた。」「楽しそうな仕事だね〜！」そう言って笑う大人の男ふたり。

「40代後半、お互い家庭を持って子供もいる。しかし歳を重ねても好きなものにまっすぐっていうところが全然変わらない。きっとそれがいいのだろうね。」とドラゴンさんがしみじみ言う。「これからも続けていけるよう誠実に、そして楽しくいきたいね。」と羽生さん。「今年お台場で『サンクチャリー』っていうDJだけのフェスを主催したんだ。大変だったけど、お客さんも出演者もみんな喜んでくれた。2018年もやるから、羽生くん、クルマ展示してよ！」「いいね、行く行く！」

思いがけず同席させてもらった『同窓会』だったが、僕もたくさんの元気をもらってしまった。きっと実現するであろうドラゴンさんと羽生さんの異業種コラボに期待しよう。



城県土浦市の中学の同級生であったこと、中学時代3年間だけの付き合いだったこと、卒業してからほとんど会ってなかったこと、最近SNSを介して連絡をとるようになったことなどを聞いた。レッドラインに到着すると、羽生さんがシャイな笑顔で迎えてくれた。

SNSでの再会以前にも、互いの消息は何となくは知っていたという二人だが、実際に会うのは思い出せないぐらい久しぶりだそう。僕にはわからない同級生の話しにひとしきり花が咲く。

「そこそこ派手で、ヤンチャな青春だったよね。」とドラゴンさんが言うと、

レッドラインオートモティブが仕上げたGT350Rルックの1965マスタング・ファストバックにも興味津々のドラゴンさんだが、羽生さんは言う。「これはね、カマロよりも手が入ってる。お客さんのクルマだから売れないよ！」

